処方番号：42　　**処方名**：鶏肝丸（けいかんがん）

処方構成：
鶏肝 1 具
鶏肝 1 具をとりゆでて乾燥し、山薬末（鶏肝の乾燥した量の 2-3 倍量をめやすとする。）を和しつつ細末とし糊丸とする。

用法・用量：
丸：1 回 2g　1 日 3 回

しばり：
体力虚弱なものの次の症状

効能・効果：
虚弱体質

原典：勿誤薬室方函
出典：

解説：
漢方ではビタミン A の補給に本方を用いる。

42.鶏肝丸

参考文献名		鶏肝	用法・用量
処方分量集		1具	鶏肝1具を採り、これを茹でて乾燥し、薯蕷末を和しつつ細末とし糊丸とする。1回量2、1日3回
診療の実際	注1	1具	鶏肝1具をとり、一旦茹でてから乾燥し、山薬末を和しつつ細末とし、糊丸とする。1日3回2ずつ服用する。
診療医典	注2	1具	鶏肝1具をとり、一旦茹でてから乾燥し、山薬末を和しつつ細末とし、糊丸とする。1日3回2ずつ服用する。
症候別治療		−	
処方解説		−	
後世要方解説		−	
漢方百話		−	
応用の実際		−	
明解処方		−	
漢方処方集		−	
漢方入門講座		−	
漢方医学		−	
精撰百八方		−	
古方要方解説		−	
成人病の漢方療法		−	

注1　夜盲症：急性夜盲症には現在は肝油を用いるが，漢方では鶏肝，牛肝，鰻鱺等を用いた。ビタミンAの補給を以ってしたことは昔も今も変わりはない。　五苓散……鶏肝丸を兼用とする。苓桂朮甘湯……鶏肝丸を兼用する。

注2　夜盲症：急性夜盲症には現在肝油を用いているが，漢方では鶏肝，牛肝，鰻鱺などを用い，ビタミンAの補給をしていた。五苓散……鶏肝丸を兼用とすればさらによい。苓桂朮甘湯……この場合も鶏肝丸を兼用する。

処方番号：43　　**処方名**：桂姜棗草黄辛附湯（けいきょうそうそうおうしんぶとう）

処方構成：

桂枝 3、生姜 3、甘草 2、大棗 3-3.5、麻黄 2、細辛 2、加工ブシ 0.5-1

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱あるいは高齢者で寒気を訴えるものの次の諸症

効能・効果：

感冒、気管支炎、関節痛、水様性鼻汁を伴う鼻炎、神経痛、腰痛、冷え症

原典：金匱要略

出典：

解説：

桂枝去芍薬湯と麻黄附子細辛湯を合わせた処方である。体力のある人が、外部の冷えにあたると、汗腺を閉じて熱の放散を防ぎ、体温を高くして防衛するのだが、もともと体力が乏しい人では、熱の生産ができないために体温を生産できず、ただ寒気だけを訴える。特に虚弱者や高齢者のかぜに使われている。外からの寒と、体内の冷え（水毒）による、頭痛・発熱・関節痛・身体痛とに使う場合と、体内の冷えた水を温めることにより、喘咳　水様性の鼻汁をともなう鼻炎　浮腫　神経痛　麻痺に使われる場合がある。また桂枝湯にはもともと気の上衝（動悸・頭痛・胸の詰る感じ）の効能があるが、それを強めたのが桂枝去芍薬湯である。そこで、本方も気の上衝である、動悸・頭痛・胸の詰る感じにも使われる。

原典である、『金匱要略』では「気分、心下堅く、大なること盤のごとく、辺旋杯のごときは水飲のなす所、本方が主る」（気がみぞおちにつかえてかたくなり、その大きさが盆のようで、その縁である境界線がはっきりしているのは飲んだ水に原因している。それには本方がよい）と書かれていて、縁がはっきりした盆状の不明のしこりに、大気一転の薬として使われたり、「気分」を心因性と解釈して、心配・驚きなどの精神的なことから来る腰痛に使われることがある。

43.桂姜棗草黄辛附湯

参考文献名		桂枝	桂心	生姜	乾生姜	甘草	大棗	麻黄	細辛	附子	大附子	附子炮	炮附子	用法・用量
漢方診療医典		3		3		2	3	2	2	0.5-1				
漢方処方応用の実際	注1	3		3		2	3	2	2	0.5				
臨床応用漢方処方解説	注2	3			1	2	3	2	2	0.5-1				
金匱要略入門	注3	3		3		2	3.5	2	2			0.5		
症候による漢方治療の実際	注4	3		3		2	3	2	2	0.6				
続漢方治療百話			3両	3両		2両	12枚	3両	3両		1枚			
経験漢方処方分量集		3		3*		2	3	2	2	1				*又は乾生姜1
改訂新版漢方処方分量集	注5	3			1	2	3	2	2				3*	*又は白川附子1
漢方入門講座(Ⅰ)	注6	-		-		-	-	-	-	-				
増補改訂漢方入門講座(上)	注7	3		3		2	3	2	2				3*	*又は白川附子1
新撰類聚方	注8	3両		3両		2両	12枚(3.0)	2両	2両			1枚(0.3		
1000万人の漢方診断と治療の実際	注9	3		3		2	3	2	2	1				
実用漢方療法	注10													

注1
[目標] 1)熱がでて、頭痛、喘咳、身体痛、関節痛などがあるとき悪寒が多く、熱感が少ないもので、脈は浮のことも沈のこともあるが、緊張が弱く、体力がとぼしく、体質虚弱な人である。
2)腰痛。相見三郎氏は、腰痛という形であらわれた心身症によい。これは、「わだかまった胸元のつかえが上半身をのばそうとすると、胸腹部の内側であたかも大きな杯の底を内側にして抱きこんだように、腹壁につかえてのばせない、そこで前こごみになって無理な姿勢を無意識のうちにとりつづける、それが腰骨の痛みになる。」と発表している。
[応用] 感冒、気管支炎、老人の慢性気管支炎で春秋の季に増悪するもの。

注2
・気血ともに虚し、それに寒を兼ねて心下に停水があり、さらに気の動揺の加わった場合に用いる。脈は遅くて濇り、手足冷え、腹満脇鳴などがある。
・本方は栄衛や気血が寒によって阻止され、調和を欠いたものをよく調和させ、さらに気が凝って心下につまり、気分のすぐれないときその気を開く。または諸病難症痼痼疾となって治療の道が杜絶したものを、よく一転打開するの意味で応用されることがある。すなわち、神経痛・リウマチ・腰痛・きやり腰・半身不随・浮腫・感冒(冷え症)・老人寒冷時の喀痰症状・乳癌・子宮癌・肺結核の末期症状・梅毒・舌腫痛・脱疽・慢性上顎洞化膿症等で、一般の治療をもってはいかんともしがたい痼疾に応用される。

注3
気分で、心窩部に硬結があって、大きさは盤(鉢)の如く、周辺は円い杯のようなのは、水飲が原因で起こるのであるが、桂枝去芍薬加麻辛附子湯の本格指示である。

注4
副鼻洞炎

注5
目標　手足身冷え、悪寒骨疼、腹満腸鳴、麻痺、或は浮腫、或は咳、難病の動かし難きもの
応用　浮腫、麻痺、疼痛、腹水、腎臓病、蓄膿症、肝硬変症

注6
表寒、裏虚、停水の状態で胸満するのが肺炎の場合の目標である。それ故臨床的には沈或は弱の虚脉を現わし、咳嗽喀痰の外に胸が苦しい、張る、呼吸促迫等を訴える。恰も炙甘草湯に似てその裏の一つまり炙甘草湯が血熱であるのに対し桂姜棗草黄辛附湯は血寒であるかの如き症状を呈する。

注7
不足を起し転じて水証或は血証を生じたのを治す。

注8
一、神経痛・リウマチ・知覚麻痺等で身体手足が冷え或は腹満腹鳴を伴うもの
二、浮腫で貧血冷え性で心下部が堅く張るもの
三、感冒などで発熱悪寒喘咳が甚だしく冷え性のもの
四、老人で毎年秋冬の気候の変わりめに喀痰咳嗽胸背脇腹がつれて痛み悪寒するもの
五、乳癌・子宮癌・皮膚癌・肺結核・梅毒・舌腫瘍等の難病で出血或は疼痛があって普通の治療ではうまくいかぬもの
六、蓄膿症で虚弱体質冷え性のもの

注9
感冒、気管支炎、喘息、神経痛、リウマチ、乳癌、パンチ病、浮腫

注10
あまり体力のない人の腰痛で、鼻水が出やすかったり、あちこちの筋肉も痛んだりするような場合には、この処方がよく効くことがあります。

処方番号：44　　**処方名**：桂枝湯（けいしとう）

処方構成：
桂枝 3-4、芍薬 3-4、大棗 3-4、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、甘草 2

用法・用量：
湯

しぱり：
体力虚弱で、汗が出るものの次の症状

効能・効果：
かぜの初期

原典：傷寒論、金匱要略
出典：

解説：
別名：陽旦湯
出典である『傷寒論』には本方の使用目標について多くの記述があるが、「感染症の初期で、脈が浮き、頻脈となり、悪寒、発熱、頭痛、項（うなじ）がこわばるが、脈の力が弱く、自然発汗の見られる者が適応となる」と要約できる。太陽病期で虚証の病態である。
感冒の初期に用いられることが多いが、脈の力が充実しており（実証）、自然発汗がない場合には葛根湯や麻黄湯の証であるから、これを鑑別することが必要である。
本方は気血の巡りを改善する作用があることから、感冒以外にも広く応用できる方剤で、『漢方概論』には関節リウマチ、胃腸炎、産後の下痢、原因不明の微熱への応用が記されている。臨床上、参考となる記述である。

44.桂枝湯

参考文献名		桂枝	芍薬	大棗	生姜	甘草
診療医典	注1	4	4	4	4	2
処方解説	注2	4	4	4	4	2
治療の実際		4	4	4	4	2
診療の実際	注3	4	4	4	4	2
民間薬百科	注4	4	4	4	4	2
応用の実際	注5	4	4	4	4	2
明解処方	注6	3	3	3	1(12)	2
処方分量集		4	4	4	4	2

注1 本方は傷寒論の最初に出てくる薬方で，血行をさかんにし，身体を温め，諸臓器の機能をたかめる作用があり，感冒のような熱のある病気に用いるときには，悪寒または悪風，発熱，頭痛があって，脈浮弱であるものを目標とする。この場合，汗が自然に，にじみ出るような状態のものもあるが，汗の出ていないものにも用いてよい。熱のない一般雑病に用いるときには，悪風や悪寒はないが，脈は弱い。

本方は感冒，神経痛，頭痛，寒冷による腹痛，虚弱体質，妊娠悪阻などに用いられる。

注2 太陽病の冒頭の薬方で，外感に用いる場合は，脈は浮弱で，悪感・悪風・発熱，頭痛，自汗，身体疼痛というのが目標である。また気の上衝があり，乾嘔・心下悶のあることもある。自汗は服薬前に自然に汗のあるもので，虚弱体質のものに用いられることを示している。気血，栄衛が調和せず，表が虚して熱のあるもの，あるいは気の上衝するものを治すので，舌には変化がない。腹症は特記すべきことはないが，腹壁が薄く緊張することもある。

平素からやや虚弱体質で，表が虚している(皮膚の抵抗力が弱い)ものの外感に用いることが多い。その他一般虚症の体質者に起こる雑病に応用され，また加減方が多く，それぞれ多くの疾患に用いられる。

本方は主として感冒・神経痛・リウマチ・頭痛・寒冷による腹痛・神経衰弱・虚弱体質・陰痿・遺精等に応用される。

注3 本方は血行を盛んにし，身体を温め，諸臓器の機能を亢める効用があるので，広く諸疾患に応用される。応用の第一としては感冒であるが，その場合の目標は悪寒・発熱・頭痛・脈浮弱・自汗が出る等の症候複合である。この脈弱と自汗が出るという症状は，桂枝湯が，葛根湯や麻黄湯に比較して虚弱体質に用いられることを示すものである。すなわち表の虚が桂枝湯で表実が葛根湯・麻黄湯の証である。桂枝湯の腹証は必らずしも一定しないが，脈弱に相応したもので，決して強状充実した腹ではない。

桂枝湯の応用は感冒・神経痛・リウマチ・頭痛・寒冷による腹痛・神経衰弱・虚弱体質・陰痿・遺精等である。

注4 この処方は，「傷寒論」という古典の最初に出ているもので，感冒などの初期に，寒けと熱とがあり，脈が浮いていて弱い場合に用いる，一種の強壮剤である。

感冒，感冒にかゝりやすい幼児の強壮にも応用される。

注5 (1)脈が浮弱で，悪寒して発熱するもの。このとき頭痛したり，のぼせたり，身体が痛んだり，自然に発汗しやすかったりする。(2)熱が出たとき，発汗剤を与えて汗をかいたが，悪寒が去らず，脈は依然として浮弱のもの，また汗が出て一時よくなったが，夕方になるとふたたび熱が高くなり，ひどく悪寒がしてふるえるが，ちょうどマラリヤのような場合にも用いる。このときも脈は浮弱である。(3)下痢したあとで，大便が正常になってから身体が痛むもの。(4)以上はたいてい熱病の初期で，このほかはっきりした原因がわからず，いつまでも悪寒発熱が続き，脈が浮弱なものによい。

説明：脈浮は，脈が表在性で，触診指を軽く触れただけで触知できる脈のことである。この場合の脈浮は，表証を意味する。

桂枝湯を用いる場合は表虚証で，これは体表に病邪があり，しかも体表が虚弱で，緊張の弱いものである。このために，自然に汗が出やすいので，これは平素からだの虚弱な人に多い。このような人が発汗をともなう解熱剤をのむと，発汗がひどくて汗が止まらなくなったり，熱は下がってもからだが疲れて，なかなかおきられなくなる。また桂枝湯の証は必ず発汗するわけではなく，ときには汗が自然に出ることがない。こういうときは桂枝湯を温服し，夜具をかぶって軽く発汗させるがよいと傷寒論にでている。こういうわけで桂枝湯は，自然に汗が出ているものは汗を止め，汗のないものは発汗して熱を下げ，病気を気もちよく治す効果がある。この作用を傷寒論では，解肌(げき)といっている。

桂枝湯は傷寒論の一番初めに出てくる処方で，多くの処方の基礎になるものである。類聚方広義には，傷寒論中で桂枝の入った処方は60方ほどあり，その内桂枝を主薬とするものは30方にも及ぶといっている。また浅田宗伯は，この方は衆方の祖にして，古方でこれに胚胎するもの百有余方ありといっている。応用：感冒，神経痛，頭痛，下痢，寒冷による腹痛など。

注6 ①浮弱脈，②自汗の出る傾向がある，③頭痛，④のぼせ症を必須目標に，また①発熱，②悪寒，③身体痛を確認目標とする。

妊婦感冒，微熱，衄血，頭痛等に用いる。

処方番号：44A　　**処方名**：桂枝加葛根湯（けいしかかっこんとう）

処方構成：
桂枝 3-4、芍薬 3-4、大棗 3-4、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、甘草 2、葛根 6

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で汗が出て、肩こりや頭痛のあるものの次の症状

効能・効果：
かぜの初期

原典：傷寒論
出典：

解説：
（１）本方は桂枝湯の方に葛根を加味したものである。（２）桂枝湯証で、項部から背にかけて、緊張するものを目標として用いる。（３）葛根には筋の緊張を緩解する効がある。

44A. 桂枝加葛根湯

参考文献名		桂枝	芍薬	大棗	生姜	甘草	葛根
処方分量集		4	4	4	4	2	6
厚生省基準桂枝湯処方		3～4	3～4	3～4	4	2	6
応用の実際	注1	4	4	4	4	2	6
診療の実際	注2	4	4	4	4	2	6
診療医典		4	4	4	4	2	6
現代漢方入門		4	4	4	1	2	6
漢方あれこれ		記載なし					
明解処方		記載なし					
漢方古方要方解説		2.4	2.4	2.4	2.4	1.6	3.2

注1 桂枝湯の証で項背がこわばり，肩がひどくこるもの。葛根湯を用いたいような症状で脈の緊張が弱くて，浮弱の脈を呈し，あるいは自然に汗ばむような体質の虚弱なものに用いる。本方の応用は桂枝湯，葛根湯に準ずる。例えば，①桂枝湯（感冒，神経痛，頭痛，腹痛，下痢）②葛根湯（感冒，リウマチ，神経痛，大腸カタル）

注2 ①桂枝湯証で，項部から背にかけて緊張するものを目標とする。②葛根は筋の緊張を緩解する効がある。

処方番号：44B　　**処方名**：桂枝加厚朴杏仁湯（けいしかこうぼくきょうにんとう）

処方構成：
桂枝 3-4、芍薬 3-4、大棗 3-4、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、甘草 2、厚朴 1-4、杏仁 3-4

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱なものの次の諸症

効能・効果：
せき、気管支炎、気管支ぜんそく

原典：傷寒論
出典：

解説：
　別名：桂枝加厚朴杏子湯
　桂枝湯に厚朴、杏仁を加えた処方である。かぜをひくとぜいぜい咳をするもので、鼻水や薄い痰の出ないものに用いる。

44B.桂枝加厚朴杏仁湯

参考文献名		桂枝	芍薬	大棗	生姜	干姜	甘草	厚朴	杏仁	ひね生姜	用法・用量
処方分量集		4	4	4	4	−	2	1	4	−	
診療の実際	注1	4	4	4	4	−	2	1	4	−	
診療医典		4	4	4	4	−	2	1	4	−	
症候別治療	注2	4	4	4	4	−	2	1	4	−	
処方解説		4	4	4	4	−	2	( )	( )	−	
後世要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方百話		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
応用の実際	注3	4	4	4	4	−	2	4	4	−	
明解処方		3	3	3	1	−	2	1	4	−	
漢方処方集		3	3	3	−	1	2	2	3	−	
新選類聚方		3	3	3	3	−	2	2	3	−	
漢方入門講座		3	3	3	−	−	2	2	3	3	
漢方医学		4	4	4	4	−	2	2	4	−	
精撰百八方	注4	4	4	4	( )	−	2	4	4	−	
傷寒論梗概	注5	2.4	2.4	2.4	2.4	−	1.6	1.6	1.6	−	*1
古方要方解説	注6	2.4	2.4	2.4	2.4	−	1.6	1.6	1.6	−	*2
成人病の漢方療法		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方と民間薬百科		4	4	4	4		2	2	3		

*1、*2　1回分量、通常1日2, 3回服用

注1　本方桂枝湯の證で喘咳するものを治する。また喘息患者で桂枝湯の證を具えている場合に用いてよく奏効する。

注2　……虚弱な人で，かぜを引くとすぐ喘鳴を訴え，麻黄剤を使用しにくい場合にこの方を用いる。

注3　桂枝湯の証で，かぜをひくとぜいぜいという咳をするもの。

注4　桂枝湯の証のあるもので，喘家，つまりかぜをひくとぜいぜいした咳をするものには厚朴，杏仁を加える。太陽病をまちがって下すと病気が悪化して咳をするようになる，その時にこの方を与える。

注5　これは桂枝湯の位にて，その表邪はなお去らず，裏気が動いて胸中におよび微喘を発する等の証に対する薬方であって，主として表邪を散じ，胸中の鬱滞を解し，微喘を治する等の能を有する。

注6　故に方極にいわく「桂枝湯証ニシテ，胸満シ，微喘スル者ヲ治ス」と。この説，能く本方の効用を約言せりというべし。

処方番号：45　　**処方名**：桂枝加黄耆湯（けいしかおうぎとう）

処方構成：
桂枝 3-4、芍薬 3-4、大棗 3-4、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、甘草 2、黄耆 3-4

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱なものの次の諸症

効能・効果：
ねあせ、あせも、皮膚炎

原典：金匱要略
出典：

解説：
（１）この方は桂枝湯の方に黄耆を加えたものである。（２）皮膚に水気を含んで弾力に乏しく、盗汗、しびれ感などのあるものに用いる。

45.桂枝加黄耆湯

参考文献名		桂枝	芍薬	大棗	生姜	甘草	黄耆
処方分量集		4	4	4	4	2	3
厚生省基準桂枝湯		3～4	3～4	3～4	4	2	−
診療医典	注1	4	4	4	4	2	3
診療の実際	注2	4	4	4	4	2	3
応用の実際	注3	4	4	4	4	2	2
現代漢方入門	注4	4	4	4	1	2	3
漢方あれこれ		記載なし					
明解処方		記載なし					

注1 黄耆は皮膚のしまりをよくして，水気を去り，膿を排し，肉芽の発生をよくし，強壮の効がある。そこで虚弱児の感冒，皮膚病，盗汗，中耳炎，顔面神経麻痺などに用いる。

注2 虚弱児の感冒，盗汗

注3 盗汗，あせも，小児ストロフルス，虚弱者の皮膚病など

注4 虚弱児の感冒，盗汗，中耳炎，蓄膿，黄疸，浮腫

処方番号：45A　　**処方名**：黄耆桂枝五物湯（おうぎけいしごもつとう）

処方構成：
黄耆 3、芍薬 3、桂枝 3、生姜 1.5-2（ヒネショウガを使用する場合 5-6）、大棗 3-4

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下のものの次の諸症

効能・効果：
身体や四肢のしびれ、顔面・口腔内のしびれ

原典：金匱要略
出典：

解説：
体表部の気血の巡りを改善する黄耆と桂枝が主剤となった方剤である。基本的には陽証で虚証の者に用いるが、幅広く応用してよい。ただし、陰証の者は適応とならない。
原典である『金匱要略』には「血痺、身体不仁、風痺状の如し」と記されている。「血痺」とは気血の衰えによって起こる麻痺や疼痛のことであり、「身体不仁」は知覚障害や筋力の低下を意味する。
『漢方概論』にはその応用として「湿疹、皮膚掻痒、つよい痒み、蟯虫で痒みのあるもの。耳だれで身体の重だるいもの。」と記されている。臨床上、参考となる記述である。

45A.黄耆桂枝五物湯

参考文献名	黄耆	黄芪	芍薬	桂枝	生姜	大棗	用法・用量
漢方診療医典	3		3	3	5	3	
漢方処方応用の実際　注1	3		3	3	6	3	
金匱要略入門	3		3	3	6	4	*1
新版漢方医学＜創元医学新書＞	3		3	3	5	3	
症候による漢方治療の実際　注2	3		3	3	6	3	
経験漢方処方分量集	3		3	3	6	3	*2
改訂新漢方処方分量集　注3		3	3	3	6	3	*3
増補改訂漢方入門講座（上下）　注4		3	3	3	6	3	*4
新撰類聚方	3		3	3	6	3	*5
新古方薬嚢	3		3	3	6	4	*6

*1　以上五味、水600銭をもって煮て200銭となし、65銭を音符苦すること1日3回せよ
*2　乾　1.5
*3　又は干姜2.0　　水240を以て煮て80に煮つめ1日3回に分服
*4　人参3を加えた処方もある。
*5　右五味、以水六升、煮取二升、温服七合、日三服
*6　右五味を水1合2勺を以て煮て4勺となし、1日3回に分け温服すべし

注1
本方は金匱要略の処方で血痺という病気に用いる処方である。血痺は体表に病邪があって、からだの知覚が麻痺して風痺という病気に似たものである。風痺というのは疼痛を兼ねた麻痺である。　脚気、扁麻痺（半身不随）、顔面神経麻痺、神経症、歯痛

注2
金匱要略の血痺、虚労篇に出ていて、"血痺、陰陽俱に微、寸口関上微、尺中小緊、外証不仁、風痺の状の如し、桂枝黄耆五物湯之を主る"とあり、・痒にもちいるとは書いていないが、kろえで・痒を治したことがある。また血痺という病気にもちいているので、下肢の知覚鈍麻を主訴とする脚気に用いて著効を得たことがある。

注3
便方：水半量、常煎　　目標：血痺、身体不仁　　応用：知覚麻痺

注4
運用：知覚麻痺「陰陽俱に微、寸関上微、尺中小緊、外証身体不仁すること風痺状の如きものは黄芪桂枝五物湯之を主る」（金匱血痺）

処方番号：46　　**処方名**：桂枝加芍薬湯（けいしかしゃくやくとう）

処方構成：
桂枝 4、芍薬 6、大棗 4、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、甘草 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で腹部膨満感のある次の諸症

効能・効果：
しぶり腹、腹痛、下痢、便秘

原典：傷寒論
出典：

解説：
桂枝加芍薬湯は桂枝湯中の芍薬の量を増したものであって、桂枝湯は太陽病の治剤であるのに対し、この方は太陰病の治剤である。古人は、桂枝は陽を助け、芍薬は陰を助けるといっており、この陰を助ける芍薬の量を増して、太陰病の腹満、腹痛を治するものである。

この際、やや便秘気味のものがあり、大便が軟かで快通しないものがあり、裏急後重があって、俗にいうしぶり腹のこともある。腹筋は緊張していることが多いが、腹壁は一般に弾力に乏しく、皮がうすいという感じである。この方は、平素より胃腸虚弱のもの、胃アトニー症、胃下垂症、大腸炎、慢性腹膜炎などに用いる機会がある。過敏性腸症候群にも応用される。

46.桂枝加芍薬湯

参考文献名		桂枝	生姜	大棗	甘草	芍薬
診療医典	注1	4	4	4	2	6
治療の実際	注2	4	4	4	2	6
処方解説	注3	4	4*	4	2	6
応用の実際	注4	4	4	4	2	6
基礎と診療	注5	3	3	3	2	6
漢方処方薬		3	3	3	2	6
処方分量集		4	4	4	2	6
漢方処方		3	1	3	2	6

＊ 乾生姜に代えるときは1.5を用う。

注1 冷え症で腹が張り腹が痛いものの，大腸炎，慢性腹膜炎，直腸炎，鼠蹊部のヘルニア，陰嚢ヘルニア，痔核（いぼ痔）。

注2 軽い大腸炎で腹が痛く，しぶり腹のもの，あるいは胃下垂などがあって腹部の振水音を証明し，ガスが充満していて腹が張っているが，腹部に充実感のないものなどに応用する。

注3 桂枝湯の症で腹筋が拘攣して腹痛があり，腹満感のあるものに用いる。

注4 虚弱な人の腹痛，下痢に用いる。下痢はいわゆる「しぶり腹」で，便通のあとも便が残っているような感じがして，下痢したあともさっぱりしないものなどに用いる。

注5 腹痛の薬。頭痛がし，自然に汗の出る発熱やさむけがあり，腹が張って痛むようなものによい。急性慢性腸炎，腹痛，急性慢性虫垂炎，結核性腹膜炎，痔。

処方番号：46A　　**処方名**：桂枝加芍薬生姜人参湯
（けいしかしゃくやくしょうきょうにんじんとう）

処方構成：
桂枝 3-4、大棗 3-4、芍薬 4-6、生姜 1.5-2（ヒネショウガを使用する場合 4-5.5）、甘草 2、人参 3-4.5

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱なものの次の諸症

効能・効果：
みぞおちのつかえ、腹痛、手足の痛み

原典：傷寒論
出典：

解説：
桂枝加芍薬湯に生姜、人参を加えた処方である。みぞおちがつかえ、身体疼痛するものに用いる。

46A.桂枝加芍薬生姜人参湯

参考文献名		桂枝	大棗	芍薬	生姜	干姜	甘草	炙甘草	人参	用法・用量
処方分量集		4	4	6	4	−	2	−	4	
診療の実際		4	4	5.5	5.5	−	2	−	4.5	
診療医典		4	4	5.5	5.5	−	2	−	4.5	
症候別治療		−	−	−	−	−	−	−	−	
処方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	
後世要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方百話		−	−	−	−	−	−	−	−	
応用の実際		−	−	−	−	−	−	−	−	
明解処方		−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方処方集		3	3	4	−	1.5	2	−	3	
新選類聚方	注1	3	3	4	4	−	−	2	3	
漢方入門講座		−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方医学		−	−	−	−	−	−	−	−	
精撰百八方		−	−	−	−	−	−	−	−	
傷寒論梗概	注2	2.4	2.4	3.2	3.2	−	1.6	−	2.4	*1
古方要方解説	注2	2.4	2.4	3.2	3.2	−	1.6	−	2.4	*2
基礎と診療		−	−	−	−	−	−	−	−	
成人病の漢方療法		−	−	−	−	−	−	−	−	

*1、*2　1回分量、通常1日2, 3回服用

注1　(1)神経痛・筋肉痛・筋肉リウマチ等で脉沈遅のもの。(2)腹痛乾嘔心下痞硬身体痛のどれかが主になり脉沈のもの。(3)肩こり脚痛無月経心下痞硬の治験例がある。(4)胃痛噯気嘈雑あるいは下痢あるいは便秘し心下痞硬胸苦するものの治験例がある。(5)便秘のぼせ心下痞硬身体冷痛の治験例がある。

注2　これは発汗の後，気液が稍や脱し，内は虚燥して，身の疼痛，脈の沈遅等を現わし，表邪は解して，餘邪が少しく心下に結ぼるる等の証に対する薬方であって，主として虚燥を潤ほし，気血を調和する等の能を有する。

注3　故に方極附言にいわく「桂枝加芍薬湯証ニシテ，心下痞鞕シ，及ビ嘔スル者ヲ治ス」と。此の説，能く本方の効用を約言せりというべし。

参考：(1)臨床応用傷寒論解説　大塚敬節著

発汗後であると，ないとに拘らず身疼痛を訴えて，脈が沈遅で，しかも少陰病の証のないものは，この方を用いる。表邪が盛んで，身疼痛するものは，脈が浮緊である。麻黄湯のようなもので，発汗して，これを治する。

(2)方庸　吉益南涯著　笠井修和訳　漢方の臨牀特集号　第14巻

裏病なり。血気迫って血滞り気のびがたきものを治す。その証に「身疼痛」と言うは血滞を示すなり。痛は気のびがたき証なり。「発汗後」とは血気迫り，水の致すところに非ざるを示すなり。表に水ありて発汗せざれば，脈当に浮，あるいは浮緊を呈して，麻黄の証になるべし。この脈は発汗後なる故に表水なく，沈遅となりて血滞り気のびがたき脈を表わすなり。